

# 「非戦」思想の人類史的展望

板垣 雄三

## ① 平和の願望

創世記 12:2-3 [神がアブラハムに]地上のすべての民族はあなたによって祝福に入る  
イザヤ書 2:1-5 彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする[ミカ書4:1-5 も]  
墨子非攻上 国を攻め人を虧(か)くこと愈(いよいよ)多ければ、不仁 茲(ますます)甚だしく、罪  
益(ますます)厚し。かくのごときは天下の君子みな知りて、之(これ)を非とし不義と謂(いう)  
孟子公孫丑 天の時は地の利に如(し)かず、地の利は人の和に如(し)かず。天下を威(お  
ど)すに兵革(武器・鎧兜)の利を以てせず  
バガヴァッド・ギーター 愛する近親・知友との戦いを望まぬアルジュナは、クリシュナから  
武人の義務・ダルマと説得され、肉体を殺しても魂は殺さぬ、生/死は錯覚と覚悟  
マタイによる福音書5:9 平和を実現する人々は幸いである。彼らは神の子と呼ばれる  
クルアーン 49:13 人々よ、我は一人の男と一人の女から汝らを創造し、多様な民族・部  
族に分けておいた。それは、汝らが互いに知り合うためである

## ② 農耕型と遊牧型 戦争の〈不可避性〉観・〈有用性〉観

カインとアベル(カービールとハービール)の物語の暗示 創世記 4:1-16、クルアーン 5:27-32  
Carl Schmitt, *Der Nomos der Erde im Völkerrecht des Jus Publicum Europaeum*, 1950.  
[英訳 by G.L.Ulmen]: *The Nomos of the Earth in the International Law of the Jus Publi-  
cum Europaeum*, Telos Press, 2003. [新田邦夫訳]カール・シュミット『大地のノモス:ヨーロ  
ッパ公法という国際法における』福村書店、1976. [新版] 慈学社・(発売) 大学図書、2007.

## ③ 戦争管理 戦争理論・軍事学・兵学・戦略論

武経七書[孫子、呉子、尉繚子、六韜、[黄石公]三略、司馬法、李衛公問対]  
闘戦経(大江匡房 1041-1111 の作?)  
Carl Philipp Gottlieb von Clausewitz (1780-1831), *Vom Kriege*, 1932-34.  
Alfred Thayer Mahan (1840-1914), *The Influence of Sea Power Upon the French Revolu-  
tion and Empire, 1793-1812*, 1892.  
毛沢東「矛盾論」1937、「遊撃戦論」1938、「持久戦論」1938、「新民主主義論」1940.  
Frantz Fanon, *L'An V de la révolution algérienne*, 1959 [革命の社会学]. *Les Damnés de  
la Terre*, 1961 [地に呪われたる者].

## ④ 戦争管理 戦争の規制・戦争法規・国際法

リグ・ヴェーダ [最古のヴェーダ聖典=讃歌、編纂は紀元前 12 世紀頃] 6-75:15]: 戦争の規則としての禁止事項 毒矢の使用／老人・病人、子ども・女性への攻撃／背後からの攻撃

クルアーン : ◆「神の道」のために戦え、ただし度を越した挑戦の禁止、敵が攻撃を止めたら敵意は無用／迫害は殺害より悪い、無法の攻撃には神聖月に関係なく同等の報復を／同盟契約の裏切り・離反への懲罰／信者による信者殺害の絶対禁止、過失の代償規定／[以上について、2:190-194, 216-218, 4:84-95, 5:33, 8:55-66, 72-75, 9:12-16, 20-25, 36-38, 81-123, 22:38, 48:1, 61:4-13]. ◆正当な理由なき殺人は全人類を殺すのと同様であり、他人を生かす者は全人類を生かすのと同様 [5:32, 17:33, 2:178]. ◆殉教者 [2:154, 3:157-158, 169-171, 22:58-59]. ◆捕虜 [8:67, 70-71, 33:26-27, 76:8]. ◆身代金 [8:67]. ◆戦利品フムス (1/5) は神・使徒と近親者・孤児・貧者・旅人に／ファイ不動産 [3:161, 4:94, 8:41, 59:6-8].

トマス・アクィナス『神学大全』Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, 第 22 部第 40 問題「戦争」 「戦争はつねに罪か」の問いに「正戦」を認めるトマスは、(1)許される戦争、(2)聖職者に許される戦争参加、(3)戦争で許される策略、(4)祝日の戦争は許されるか、を検討して、(1)の要件を命令者=君主の権威／正当な開戦理由／戦闘者の正しい意図とし、(2)は否定、(3)では計画の欺瞞・不正義でない秘匿隠蔽を認め、(4)信者らの国家を守護するための正戦の遂行は祝日でも可とする。[原著翻訳から読み解くのが大変なら、柴田平三郎『トマス・アクィナスの政治思想』、岩波書店、2014. 第 8 章「正戦論—人間の罪としての戦争と平和」参照]

ヨーロッパにおける国際法の成立 オスマン帝国から得たキャピチュレーション (仏 1535、英 1579 に始まる) をつうじてイスラーム法 *シヤル siyar* を学習、条約関係・外交使節・外交慣行 (船首旗・パスポート・等) の体験を土台に、スペインのサラマンカ学派の *スアレス Francisco Suárez* やオランダから亡命した *グロティウス Hugo Grotius* らが国際法体系化。ウェストファリア体制のヨーロッパ主権国家群が主導権握る。19 世紀クリミア戦争後、戦時国際法でも一連のジュネーヴ条約 (赤十字条約、1864・1906・1929)／ハーグ陸戦 [法規慣例] 条約 (1899, 改訂 1907) を産み出し、これは第 1 次世界大戦後の海戦・空戦をも含む戦時法規改正国際委員会の活動を経て、第 2 次大戦後のジュネーヴ第 1 (軍隊傷病者)・第 2 (海上軍隊傷病者)・第 3 (捕虜待遇)・第 4 (文民保護) 各条約 [1949] と追加議定書をはじめ、ハーグ系列・ジュネーヴ系列ともに社会的・文化的にも範囲を拡張し、人間の尊厳の原則に立つ国際人道法へと性格を変えてきている。

## ⑤ 戦争批判と国際平和体制模索

### A] 戦争 [争乱] 批判のかたちと効果

墨家集団 兼愛と非攻の立場を掲げつつ、その立場から、諸国の城郭防衛を支援する専門技術者集団として活動。

アッシジのフランチェスコ エジプトのドウミヤートを攻囲する第 5 次十字軍の陣営をすり抜け、アイユーブ朝スルターン、カーミルに会見、宣教を試み<sup>(1219)</sup>、2 年間の東方滞在は在俗「小さき兄弟団」のフランシスコ会への発展 (妥協付きだが) の前提となる。

日蓮 東アジアの僧侶の往来・交流をつうじて一閻浮提(世界全体)の状況への見識・直観(「此の国は月氏・漢土に対すれば、日本国に伊豆大島を對せるが如し」の感覚)から、モンゴル襲来の「他国侵逼難」を警告する「立正安国論」(1260)を書き、鎌倉幕府に諫言するたび弾圧されても怯まず法難に耐え、武士権力と対決。警世の宗教者を排除する政治。

ジャン・ボダン Jean Bodin (1530-96) フランスの法律家・政治思想家の彼は、表向きカトリックを装いつつ自由思想と宗教的寛容の立場から、宗教改革にともないヨーロッパを覆った宗教戦争(仏ではユグノー戦争)を終わらすため、国家「主権」の概念を練り、集権的絶対王政への道を拓く。国内平和は仮に成っても、三十年戦争への道だった。

安藤昌益(1703-62)「自然真営道」・「統道真伝」 不耕貪食の輩が直耕の農民を搾取する法世の乱を批判し、互性活真が貫徹される万人直耕の平等平和な自然世の理想を後世のため記述。狩野亨吉により 19 世紀末年に発見されるまで、本州北辺で忘却された存在。「我道に争ひなし、吾は兵を語らず、吾は戦はず」を旗印とした安藤は、失(あやま)りの軍(いくさ)を鎮圧するといつて軍を起こす失りにより失りを去る、とも言う。

内村鑑三の非戦論 万朝報や平民新聞[幸徳秋水・堺利彦] 木下尚江、高木顕明

文学作品のインパクト 19 世紀におけるレフ・トルストイ『戦争と平和』のごとく、第一次世界大戦とその経験の反映で注目されるのは、アンリ・バルビュス『砲火』やエーリッヒ・レマルク『西部戦線異状なし』、またロマン・ロランやアーネスト・ヘミングウェイの作家活動である。第二次大戦にいたっては、枚挙にいとまない。

## B] 国際平和体制の模索

カント『永遠平和のために』 Immanuel Kant, *Zum ewigen Frieden: Ein philosophischer Entwurf*, 1795. 「永久平和」は政治にとって最高善／世界秩序の組織としては主権国家の自由な連合／世界市民法・国際法の不可分の裏付け／共和制・立憲制／ホスピタリティと訪問権／など

ハーグ国際平和会議 第 1 回(1899)、第 2 回(1907) [大韓帝国密使事件、義兵闘争の士官としての安重根] 参照: 李泰鎮ほか編著、勝村誠ほか訳『安重根と東洋平和論』、日本評論社、2016.

第二インターナショナル 1905 日露戦争下、前年[安部磯雄とともに]本部員となっていた片山潜はアムステルダム大会でロシア代表プレハノフと固い握手。1907 シュトゥットガルト大会および 1912 バーゼル臨時大会は反戦平和で重要決議。1914 結末は解体。

マハートマ・ガンディ サティヤーグラハ抵抗・独立闘争 南アフリカからインドへ

## ⑥ 戦争の放棄・廃絶へ

国際連盟 規約(1920) 締約国は戦争に訴えない義務を受諾し、…

不戦条約 Kellogg-Briand Pact(1928) 締約国は国際紛争解決のため戦争に訴えず、国家の政策手段としての戦争の放棄を宣言し、紛争紛議の解決は平和的手段による。

国際連合 憲章(1945) 目的1 国際の平和及び安全の維持、平和への脅威の防止・除去と侵略行為鎮圧とのための有効な集団的措置、平和破壊の虞ある国際紛争・事態の

解決を平和的手段により且つ正義及び国際法の原則に従って実現。

戦争犯罪の裁判 ニュルンベルク・東京 →旧ユーゴスラヴィア・ルワンダ・

日本国憲法

ラッセル・アインシュタイン宣言 1955 パグウォッシュ会議 1957~

核兵器反対運動の拡がり・高まり →化学兵器・地雷・クラスター爆弾、核兵器禁止条約

軍縮 海軍軍縮条約 1922/1930/1936 冷戦期以降の多様化・異次元化

国際核管理体制

民間ないし民衆国際法廷 ベトナム戦争・レバノン戦争・イラク戦争・女性・

国際刑事裁判所 2003~ [国際司法裁判所 1946~に加えて]

テロ問題

戦法イノベーション(人口知能、ロボット、ドローン、光、サイバー攻撃、宇宙、環境、…)

軍事基地問題

軍事研究問題

## ⑦ 危機進行の新局面

2003 / 3 / 19 イラク戦争はじまる

2014 / 7 / 1 集団的自衛権に関する閣議決定

2015 / 9 / 19 安全保障関連法案の参議院本会議採決

2019 / 6 / 13 安倍首相イラン訪問直後、日本船籍タンカーがUAE沖で攻撃され被弾

2019 / 12 / 27 海自の護衛艦「たかなみ」とP3C哨戒機 2 機の中東派遣を閣議決定

2020 / 1 / 3 バグダードでイラン革命防衛隊コッズ部隊ソレイマニ司令官を米軍が殺害

    / 1 / 8 イラン軍事報復作戦実行、ウクライナ旅客機撃墜

    / 1 / 10 河野防衛省、派遣命令「危険ない」という認識を表明

    / 1 / 11 イラン軍、ウクライナ機撃墜を認める声明を発表

    / 1 / 14 英仏独が「紛争解決手続き」JCPOA-DRM 発動、イランは対抗措置を示唆

    / 1 / 15 安倍首相 11 日からのサウジアラビア・UAE・オマーン訪問終了

2003 年 6 月の衆議院憲法調査会事務局作成の「憲法第 9 条(戦争放棄・戦力不保持・交戦権否認)について—自衛隊の海外派遣をめぐる憲法的諸問題」に関する基礎資料

[http://www.shugiin.go.jp/internet/itdb\\_kenpou.nsf/html/kenpou/chosa/shukenshi033.pdf/\\$File/shukenshi033.pdf](http://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_kenpou.nsf/html/kenpou/chosa/shukenshi033.pdf/$File/shukenshi033.pdf) を現時点で見なおしてみよう。

米国の凋落に関して、Chalmers Johnson (1931-2010) のBLOWBACK三部作が注目される。  
*Blowback: the Costs and Consequences of American Empire*, Henry Holt, 2000. 鈴木主税訳『アメリカ帝国への報復』集英社, 2000. *The Sorrows of Empire: Militarism, Secrecy, and the End of the Republic*, Verso, 2004. 村上和久訳『アメリカ帝国の悲劇』文藝春秋, 2004. *Nemesis: the Last Days of the American Republic*, Metropolitan Books, 2006. 邦訳ナシ (何故ないか、興味あるところ。)

【信濃毎日新聞 2020年1月9日 朝刊5面】

どう見る米イラン危機・識者に聞く（聞き手：共同通信編集委員・太田昌克）

## 「市民の抵抗 見落とすな」 板垣雄三

米国によるイランのソレイマニ司令官殺害後の中東動乱が世界に及ぼすであろう危機を受け止める国際世論には、問題を軍事力で処理しようという世界的な「軍拡」の潮流が色濃く影を落としている。

核使用もいとわない政治指導者たちの軍事優先路線が、世界の人々を惑わせてしまっているのだ。

米国が今回取った戦争への第一歩は、大国としての米国の凋落（ちょうらく）を改めて浮かび上がらせた。トランプ大統領の決定は凋落への道を決定的なものとするステップに他ならない。

そもそもトランプ政権は国家としての体を成していない。あるべき国家戦略の立案や政策決定のプロセスが米国から消えてしまった。

大統領が衝動的に政策を決め、側近も当惑しているようだ。「文化遺産への攻撃」に言及した大統領発言をエスパー国防大臣が取り消したことが象徴的だ。ここ数年の世界的な動向として、抗議のために市民が立ち上がり、変革へ向けた声を上げる傾向が強まっている。香港のデモやスーダンの市民革命が注目されているが、イランが影響力を持つイラクやレバノンでも市民が立ち上がり始めた。

2003年のイラク戦争後の米軍占領支配下で作られた宗派別の政治機構に対する異議申し立ての声がイラクの市民から、しかも多数派のシーア派の市民からも昨秋来、上がっていた。

実はこうした市民の運動を抑えつけてきたのがソレイマニ司令官だったが、彼の死は、イラクでもイランでも彼への批判を押し流してしまう。

「世界大戦の前兆だ」「石油が来なくなる」と騒ぎ立てるメディアは、こうした市民レベルでの動きの本質を見えなくさせている。

欧米がイランに対して行ってきた支配・圧迫の歴史に対する民族的な抵抗の意味を決して見落としてはならない。

最後に、日本はどうすべきか。このような状況下で海上自衛隊の艦船を中東へ派遣することは、あまりにも状況認識を誤っていると言わざるを得ない。本来なら和解を促す使節団を関係国に派遣すべきではないか。それができない平和国家・日本も凋落の危機にある。

いたがき・ゆうぞう 東京大名誉教授

1931年東京生まれ。専門は中東・イスラーム研究。

***Blowback: The Costs and Consequences of American Empire***[\[edit\]](#)

In *Blowback*, I set out to explain why we are hated around the world. The concept "[blowback](#)" does not just mean retaliation for things our government has done to and in foreign countries. It refers to retaliation for the numerous illegal operations we have carried out abroad that were kept totally secret from the American public. This means that when the retaliation comes – as it did so spectacularly on September 11, 2001 – the American public is unable to put the events in context. So they tend to support acts intended to lash out against the perpetrators, thereby most commonly preparing the ground for yet another cycle of blowback. In the first book in this trilogy, I tried to provide some of the historical background for understanding the dilemmas we as a nation confront today, although I focused more on Asia – the area of my academic training – than on the Middle East.

— *Chalmers Johnson, Nemesis: The Last Days of the American Republic (2006)*

***The Sorrows of Empire: Militarism, Secrecy, and the End of the Republic***[\[edit\]](#)

*The Sorrows of Empire* was written during the American preparations for and launching of the invasions and occupations of [Afghanistan](#) and [Iraq](#). I began to study our continuous military buildup since World War II and the 737 military bases we currently maintain in other people's countries. This empire of bases is the concrete manifestation of our global [hegemony](#), and many of the blowback-inducing wars we have conducted had as their true purpose the sustaining and expanding of this network. We do not think of these overseas deployments as a form of empire; in fact, most Americans do not give them any thought at all until something truly shocking, such as the treatment of prisoners at [Guantanamo Bay](#), brings them to our attention. But the people living next door to these bases and dealing with the swaggering soldiers who brawl and sometimes rape their women certainly think of them as imperial enclaves, just as the people of [ancient Iberia](#) or [nineteenth-century India](#) knew that they were victims of foreign colonization.

— *Chalmers Johnson, Nemesis: The Last Days of the American Republic (2006)*

***Nemesis: The Last Days of the American Republic***[\[edit\]](#)

In *Nemesis*, I have tried to present historical, political, economic, and philosophical evidence of where our current behavior is likely to lead. Specifically, I believe that to maintain our empire abroad requires resources and commitments that will inevitably undercut our domestic democracy and in the end produce a military dictatorship or its civilian equivalent. The founders of our nation understood this well and tried to create a form of government – a republic – that would prevent this from occurring. But the combination of huge standing armies, almost continuous wars, [military Keynesianism](#), and ruinous military expenses have destroyed our republican structure in favor of an imperial presidency. We are on the cusp of losing our democracy for the sake of keeping our empire. Once a nation is started down that path, the dynamics that apply to all empires come into play – isolation, overstretch, the uniting of forces opposed to imperialism, and bankruptcy. [Nemesis](#) stalks our life as a free nation.